【実施報告】

第 44 回オンラインセミナー「SDGs 先進国フィンランドから学ぶウェルビーイング施策」

第 44 回目のセミナーでは、ヘルシンキ大学非常勤教授の岩竹美加子氏を迎え、地方自治体における SDGs の推進とウェルビーイング施策の関連について講演いただいた。

セミナーの主な内容について、以下のとおり報告する。

１）概要

〇日　　時：2025 年８月７日（火）　17 時 00 分から 18 時 00 分まで（日本時間）

〇当日参加者数：117 名（申込者数：183 名）

〇プログラム：①開会挨拶・講師紹介　（17:00～17:05）

②講演　（17:05～17:40）

③質疑応答　（17:40～18:00）

２）講演内容

＜SDGs について＞

- 2015 年に国連で「SDGs のためのアジェンダ 2030」が採択され、持続可能な発展を目指す目標が示されている。毎年達成度ランキング（レポート）が公開され、フィンランドは５年連続で 167 か国中１位となっている（日本は 19 位）。しかしながら、フィンランド国内では、さらなる努力が必要であるとの自己評価がされている。
- フィンランドで SDGs は「アジェンダ 2030」という形で取り組まれている。17 の目標は各省庁が共有し、各分野で実施している。自治体も同様である。

＜フィンランドと日本の比較＞

	フィンランド	日本
人口	約 560 万人	約１億 2,380 万人
一人当たり GDP	約 785 万円	約 479 万円
ジェンダーギャップ指数（148 か国中）	総合２位	総合 118 位
報道の自由度（180 か国中）	５位	66 位

＜フィンランドの取組＞

- 政府が発行する「アジェンダ 2030」という自主的レポートでは、世界情勢の文脈にフィンランドの目指す目標とその政策を置き、その実施状況と課題について説明されている。具体的には、カーボンニュートラルなウェルビーイング国家、循環経済、社会保障制度、議会政治にとどまらない民主主義、性と生殖に関する健康と権利(SRHR)、人権・平等が基盤であること等の政策について記載されている。
- フィンランドのウェルビーイングは心地良さ、生活の快適さ、人との繋がり、権利が脅かされていない、

問題があったらサポートを受けられるなど、自分の体感から発し、それを実現するウェルビーイング社会へ、それを保証するウェルビーイング国家へと連結している

＜ヘルシンキ市の取組＞

- 人口は約 69 万人。少子化であるものの、移民によって人口は増加中である。
- ヘルシンキ市が自主的に発行している『アジェンダからアクションへ』というレポートに具体的な施策が記載されている。
- 二酸化炭素の排出量は 2021 年から 2023 年の間で 17%の削減を達成した。これは、2030 年までに 1990 年代と比較して 80%の減少を達成できる水準である。
- 社会的階層による住み分けの防止や、子ども・若者間の分断の防止のための支援を実施している。例えば、開発の際には、分譲住宅だけでなく低所得者向けに賃貸住宅を一定数含めるといった政策がある。
- 移民が多いことから、教育の場面では反レイシズムを推進している。
- 国連の「子どもの権利条約」を学校教育で扱っている。子ども自身がどのような権利を持っているのかについて教え、他の人も同じ権利を持つこと、それを尊重することが義務であることなども教えている。
- 放課後活動の「フィンランドモデル」は、日本の部活動に当たるもので、小学校３年生から中学校３年生の期間で実施されている。運動・文化・デジタルの３つに分野が分かれており、活動の種類は多種多様である。日本の部活動と異なることとして、他の学校に行くこともできる。
- 性的マイノリティとのプライド・パートナーシップも実施している。

＜ヘルシンキ市の SDGs の取組＞

- SDGs17 の目標について、昨年度から「改善」、「同水準」、「低下」の３段階で示している。
  「改善」とされた目標は、「目標２　飢えをなくす」、「目標４　質の高い教育」、「目標６　清潔な水と衛生」、「目標７　安価でクリーンなエネルギー」、「目標９　産業と技術革新、インフラ」、「目標 17　パートナーシップ」であった。一方で「低下」とされた項目は「目標 12　責任ある消費と生産」であった。

＜フィンランド・ヘルシンキ市の SDGs の特徴＞

SDGs は、フィンランドの政治・社会政策・考え方の延長上にあると考えることができ、不平等や格差を嫌うこと、人権、ウェルビーイング、民主主義、法の支配という考え方が基盤にある。

- SDGs 実現のためには十分な教育を受けたアクティブな市民がいることが重要であるとされている。フィンランドの学校教育の最終的な目標は、自分自身で批判的に物事を考えられる能力を身に着けることであり、学力や偏差値を高めることではない。学校教育の在り方と SDGs 実現のための方向性は一致している。
- ウェルビーイングは各個人が体感する心地よさが社会や国家へと繋がっていくと構想されており、フィンランドにおけるウェルビーイングの概念の幅はとても広い。したがって、SDGs の目標３「健康とウェルビーイング」にとどまらず、すべての目標がウェルビーイングと連結していると考えることもできる。

＜日本・東京の SDGs の特徴＞

- 内閣官房・内閣府総合サイトでは「地方創生」の文脈で、農林水産省では企業の取組として紹介されて

いるにとどまる。

- 東京都では、市区町村の取組紹介やワークショップ、ゲームで SDGs を学ぶといったものである。
- フィンランドと比較すると、SDGs への理解はとても狭く、不完全であるように伺える。
- SDGs の 17 の目標の日本語訳についても不正確かつ削除されている項目がいくつかある。例えば、目標６「清潔な水と衛生（Clean water and sanitation)」は「清潔な水とトイレ」と訳されており、衛生の概念を矮小化している。また、トイレの安全性に対しての取組がされているかも疑問である。そのほかにも、目標８「適正な労働（decent work)」を「働きがい」と訳すなど、不正確な日本語訳が見受けられる。

＜SDGs の課題＞

- 国際的な潮流としては 2025 年３月に、アメリカ合衆国が国連総会において SDGs を非難する出来事や、ポリティカル・コレクトネスを嫌う風潮、気候変動は人為的理由によるものではないという主張がなされている。
- フィンランドは５年間連続で１位という評価はされているものの、不十分という認識がある。2024 年からの現政権は中道右派で、地球温暖化政策や社会保障政策に消極的な姿勢となっている。
- 日本は、「飢え」「ジェンダー平等」「エネルギー」「適正な労働」等は課題として指摘されているが、喫緊の課題とは捉えられていない。また、日本ユニセフ協会による SDGs の説明では、黒い肌の人やイスラーム圏女性の画像のみが使用されており、SDGs を自国の問題として捉えていないように伺える。

３）質疑応答

Q．SDGs とウェルビーイングの関連について、SDGs 施策を実施することでウェルビーイング国家となるのか、ウェルビーイング国家だから SDGs を達成できるのか、どちらが原因と結果の関係性であるか。

A．国連は、SDGs の 17 の目標の中にウェルビーイングを含めている。しかしフィンランドでは、SDGs はウェルビーイングの文脈で解釈されている。フィンランドには 1800 年代の哲学者であるユーハン・ヴィルヘルム・スネルマンの思想が基盤にあり、その後 1960 年代から実際に政策としてウェルビーイング国家への転換が図られてきた。SDGs という概念はそのあとに生まれたものであるため、SDGs をウェルビーイングの文脈で解釈するという土壌があると言える。

Q．議会政治だけでない民主主義ということについて、なぜそのような市民活動が活発であるのか、その政治的・文化的背景は何か。

A．社会民主主義の影響を強く受けている。市民一人ひとりが参加するという意識が根付いている。エリートによる上意下達ではなく、啓蒙主義的であり、市民の活動を促している。

Q．性と生殖に関する健康と権利について、どうしてそれを行政サービスとして提供できるのか、日本との意識の差は何か。

A．包括的な性教育が小学校から行われているという土壌は、理由の一つとして考えられる。日本の避妊の主流がコンドームであること、麻酔分娩の少なさなどの現状は、フィンランドの 1960 年代以前の状態と言える。

Q．1960 年代以前のフィンランドは今の日本に近い部分があったのか。
A．昔のフィンランドはとても保守的であった。世界的には 1960 年代の学生運動、政治運動、性の解放といった動きがあったが、日本はその成果があまりないまま現代に至っているようだ。

Q．SDGs の日本語訳について、日本政府はそれを意図的に実施しているのか。
A．それは分かりかねる。参照した日本ユニセフ協会は前述したような訳を使用している。フィンランド語訳・英語訳と比較すると、日本語訳にはそのような特徴がみられる。

Q．フィンランド人のウェルビーイングの考え方である「体感から発せられ、社会・国へと繋がる」という説明について、日本の場合はそれが希薄であるため、社会や国・政治のウェルビーイングが浸透しないのか。この状況を変えるためには教育の持つ意味は大きいか。
A．その通りだと思う。フィンランドの教育はこの点でも優れていると言える。最近の PISA（学習到達度調査）では、フィンランドの順位は下がってきている。しかし、フィンランドの教育の目的は学力を向上させることよりも、いかに学ぶかを学ぶこと、批判的視点を持ち、自分自身の価値や道徳を持って生きていくことである。それはウェルビーイング社会・国家を支えるものであり、フィンランドの教育の意義は大きい。

Q．フィンランドが捉えている自国の課題は何か。
A．例えば、男女平等については世界２位と言われているが、女性の賃金は男性の 84％であり、いまだ解消されていない。他にも、二酸化炭素の排出量をさらに減らす、デンマークと比較して自転車の活用が少ないなど、課題は様々である。

Q．日本のジェンダーギャップは世界的にも大きく、男女平等が進んでいないのが現状である。女性活躍を推進するために日本ができることは何か。
A．すべてにおいて女性の割合を増やすことは良いと思う。日本のニュースを見ていても、意見を言うのはほとんど男性で、女性の発言はとても少ない。しかし、表層的に施策の真似をしても限界がある。フィンランドは、人権、ウェルビーイング、平等、民主主義などが国家の根幹となっている。

Q．日本での SDGs の認知度はまだ低い。フィンランドでは積極的な広報などはしているか。
A．フィンランドでも認知度は低いかもしれない。ヘルシンキ市では、市の総合政策や基本方針に SDGs が当てはめられている。具体的に実施している施策として、自転車専用道や路面電車の軌道敷の拡大など、目で見て分かるような政策もあるが、それを SDGs の施策であると認識している個人は少ないかもしれない。学校教育では教えている。

Q．フィンランドの教育について、子どもが SDGs を身近に感じられる体験などを織り込んだ内容となっていることもあるのか。
A．例えば、SDGs の目標にある陸の生命という項目があるように、フィンランドにおいては森林で半日過ごすような授業もある。こうした場で SDGs 的な教育もしている。